日本伝講道館柔道と競技スポーツについて

安河内春彦

序論

現在、スポーツは国や地域の枠を越え、老若男女、誰もが参加できるものとして多くの人々に親しまれている。しかし、スポーツが取り入れられ、発展していくなかで、本来のスポーツのもつ性質が薄れてきているように感じられる。人がスポーツを行う目的は様々で、健康のため、仲間づくり、あるいはレクリエーションとしてスポーツを行う。「自分はあの大会に出て優勝したい」「自分はチャンピオンになりたい」ということを目的にスポーツをしている人もいる。人によってスポーツを始める動機は異なるが、最初は健康のためとか楽しみでスポーツに携わっている人でも、時が経ち、そのスポーツに習熟してくると“勝ちたい”という意欲が芽生えるというのが人間の心理なのである。

競技スポーツである限り、勝ち負けというものが存在し、競技者はやるからには勝たねばならぬという心理状態にある。しかし、勝ちたいという意識が過剰に強まり、ドーピングによる筋肉の増強や身体を一時的に興奮状態にさせたり、自分自身の身体に傷をつけ、健康を害してまで勝利のみを追求してしまう競技者もいるのが現状である。

また、対戦相手を非難中傷したりする事件も起きている。これらの行為は、全ての競技者が行っているのではなく、一部の競技者が勝利を過剰なまでに意識してしまい起こるもので、その問題がマスコミなどに取り上げられ世間に広がると、競技者だけでなく、競技そのもののイメージを悪化させ競技者人口の低迷にもつながってしまうのである。勝利を目指して公正に競い合った仲であればこそ、勝利者を称え、敗者の気持ちを尊重することになる。

柔道が世界的に普及・発展したのは、競技スポーツ柔道としての外面的な発展であり、講道館柔道の本質である内面的な部分が置き去りになっているのが現状である。このことは、柔道がお家芸である日本においても同様であると言える。

このような現状の中、競技スポーツ柔道の外面的な部分と講道館柔道の内面的な部分が伴ってこそ本来の柔道であるとの思いから、本稿では、それぞれの本質を究明し、いくつかの提言をしたいと思う。

九州産業大学健康・スポーツ科学センター

第１章　スポーツの定義

現在、世界各国・各地域で親しまれているスポーツそれは、余暇を効率よく楽しく豊かに過ごす方法であったり、ストレスの解消、健康の保持増進の為に行ったり、スポーツ界の最高峰であるオリンピックで金メダルを取るという目標を立てて行ったりと、スポーツを行う者それぞれに目的はあり、それによって価値観も変わってくるのである。そもそもスポーツの起源は「遊び」であると言われている。オランダの歴史学者Ｊ・ホイジンガは、「遊び」の形式的特徴として次のようなものを提示している。

１．命令されない自由な活動。命令されてする遊戯はもはや遊戯ではない。

２．物質的利害や生活における必要のためだけでなく、遊び自体に充足を求める活動。

３．現実の日常生活から、時間的にも空間的にも区別された場所で行われる活動。

４．遊びの結果はやってみないとわからない（緊張・不確実性）。「遊び」は、この緊張状態を解こうとする努力である。

５．それぞれの遊びはそれぞれの規則を持ち、遊んでいる間はその規則は絶対であり、不服従は許されない。

これらの特徴が「遊び」たらしめる要素であり、人間の活動がこの遊びの要素を持つと文化が生成し育まれるが、それを失うとき、文化もまた消失するとホイジンガは説く。[1)]

一方、ホイジンガの理論を継承し補充したフランスの社会学者Ｒ・カイヨワは、以下のような性質を持つものを「遊び」として定義づけている。

１．自由な活動ー遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば遊びは、たちまち魅力的な愉快な楽しみという性格を失ってしまう。

２．隔離した活動ー明確な空間と時間の範囲内に限定されていること。

３．未確定の活動ーゲーム展開や結果が先に決定されていたり、わかっていないこと。創意の必要があり、ある種の自由を遊戯者に残すこと。

４．非生産的な活動ー財産や富などの新しい要素を作り出さないこと。

５．規則ある活動ー約束ごとに従う活動通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立し、その法だけが通用する。

６．虚構の活動ー日常生活と対比した場合、非現実であるという特殊な意識を伴うこと。[2)]

このように定義のうえではホイジンガと類似しているが、ホイジンガが遊びの種類を競争と演技（表現）の２つに分けたのに対し、カイヨワはアゴン（競争・競技・試合）、ミミクリー（模倣・変身）、レア（運・偶然・儲け事）、インクス（めまいを生じさせる遊び・急回転・落下運動）の４つに分類し、さらに遊びの発展水準の観点から、パイディヤ（即興的で気まぐれな遊び）とルドゥス（秩序の明確な遊び）の二極を設けた。これに従えば「競技スポーツはアゴンの範疇に属し、ルドゥスの極に位置するもの」とされる説を述べている。

第２章　柔道における競技スポーツの要素

現在、日本国内での日本伝講道館柔道は、子どもから高齢者まで幅広い年齢層で親しまれて

いる。また、性別、職業、国籍など関係なく、大勢の人々が柔道に励んでいる。その目的として、強くなりたい一心の人、弱い身体を鍛えたい人、自分の精神を練りたい人、快い汗を楽しみたい人、安全の能力を身につけたい人、柔道の指導者になりたい人、現に指導に専念している人など様々な人がいる。

嘉納治五郎師範が考案した柔道は柔術とは違い、投げ技において、「崩し」「作り」「掛け」という運動構造によって成り立っており、その一般的法則性を明らかにすることで、学習・教授の合理化を図り、危険な技を排除し、「乱取り」を積極的に導入することで、学習者の興味づけも行った。また、柔術で危険とされていた技は、「形」として現在に受け継がれている。[3] このように、柔道は誰にでも出来るようにと改善されたのである。

現在のスポーツは、「勝利者至上主義」の傾向にあり、競技力の向上や国際大会でのメダルの獲得数などのために力を注がれてしまっている。従って、柔道＝スポーツとういうことになると柔道本来の目的から離れてしまう。嘉納治五郎師範は次のように述べている。「競技運動（スポーツ）の目的は単純で狭いが、柔道の目的は複雑で広い。いわば競技運動は、柔道の目的とするところの一部を遂行しようとするにすぎない。柔道を競技的に行うことは、もちろん出来るし、してもよいのだが、ただ、そういうことをしただけで柔道本来の目的は達し得られるものではない」現実問題、柔道はスポーツ化しすぎたと言っても過言ではない。これは、柔道の練習方法として、形よりも勝負法を学ぶための乱取りを中心に行ってきたことに加え、西洋のスポーツ概念が入ってきたためである。嘉納治五郎師範は晩年、講道館で行われている柔道を見て、「これは私の柔道ではない」と言ったそうだ。

柔道とスポーツの違いとして、柔道を学ぶ者は始めに受け身を習い、自分の身を守るほか、謙虚さを磨くためにトレーニングをおこなう。もしも自分の身を守るためだけのものならば、はじめから誰にも負けない技術を身につければよいのだが、あえて投げられた後の稽古、つまり負ける稽古をする。受け身をとることによって、お互いに痛みを理解し、相手を思いやる精神が育てられるのである。

また、柔道や剣道といった武道では、勝者はガッツポーズをしないこと、敗者は無念の表現をしないことが教えの基本にある。この点、大相撲の世界は、いまだにこの伝統のよさを残している。なぜガッツポーズをしてはいけないかと言うと、それは、自分を磨き、人を生かすための道を究めることが武道の目的だからである。この精神というものは、試合で対戦する相手は、戦う相手というよりも、互いに切磋琢磨している仲間であり、だとすれば試合を終えた勝者のガッツポーズと敗者のくやしさの表現は存在しないのである。

この自分の感情を抑える武道教育が、他のスポーツとの違いであり、武道を学ぶものが誉められるところなのである。選手にすれば、つらい修行がようやく報われた、ほんの一瞬の喜びの表現なのだが、勝ってなお相手を思いやる心が大切である。近年では勝利の喜びを体いっぱ

いに表現する選手も多く、前述したような武道の精神が薄れ、競技スタイルやルールなどと同様に競技スポーツとしての感覚や要素が強まっているのが現状である。

第３章　柔道における生涯スポーツの要素

我が国は、週休２日制や学校週５日制の完全実施などで、自由時間が増大したことや、少子高齢化が進んだことによって、人々の生活様式が変化している。また、都市化や生活が便利になるなど生活環境も変化したことにより、身体的活動は減少し、精神的にストレスも増大している現状にある。特に、教育現場での少年の学力・運動能力の低下、いじめ等のこころの問題の増加、また、一般社会での凶悪犯罪の横行、薬物の乱用、性の逸脱行為等々が深刻化している。このような中で、スポーツは、からだを動かすことで爽快感や満足感などを与えるとともに、健康の保持増進や体力の向上にも大きく寄与し、心理的・肉体的に最も重要な時期である少年期に、熱中できるスポーツ等の場を地域社会につくることが、これら深刻化する社会問題の一部解消の手助けとなるのではないかと考える。

柔道に限らず、どのスポーツでも、「こうしたら相手はこうなる。こうなれば相手を傷つける。」と言ったことはごく当たり前に少年期に身に付けるものであり、実践・体験をとおし、その心の「痛み」、体の「痛み」が分かり、「危険なこと」、「してはいけないこと」の分別を心理的・肉体的に認識できる人間へと導かせる教育的価値をもっている。

また、超高齢化社会を迎えている我が国には、十分な福祉制度や施設が整っていないのが現状であり、高齢者は自分の身の回りのことは自分でできるような体力を保持していなければならない。そこで、1989年の保健体育審議会答申「21世紀に向けたスポーツ振興方策について」の中で、21世紀にむけたスポーツ振興の一環として「生涯スポーツ」が提案された。「生涯スポーツ」とは、だれもが生涯の各時期にわたって、それぞれの体力・年齢・目的に応じて、いつでもどこでもスポーツに親しむことにより、スポーツを通じて健康の増進や体力の向上をはかり、仲間との交流やふれあいなど、生きがいのある生活を送ることを目的としたものである。

柔道において生涯スポーツの要素は「形」の存在である。柔道の修行は、形と乱取りの二様式の稽古で行われる。形はあらかじめ組み立てられた理論にしたがって順序よく攻防する方法で、攻防の理論を理解し、原則的な技術を学ぶのに重要である。乱取りは、投げ技や固め技を用いて自由に攻防し合うもので、相手の動きに応じて軽快な進退、機敏な体裁きで身をこなす。その一方、形は勝敗にこだわらず相手を尊重する態度を重んじると同時に、一定の運動量を確保することができるのである。形は競技種目として大会が開かれており、形の演技に磨きをかけ、日々、鍛錬している人もいる。

このように柔道には「生涯スポーツ」として、いつ、どこでも、誰とでもできる要素を十分に含んでいるのである。また、柔道は生涯スポーツとしてだけでなく、礼法や相手を思いやる精神の育成など、人としての正しい道を導くもの

として、生涯教育の観点からしても、十分にその役割を果たす存在であると言っても過言ではない。

第４章　柔道ルネサンスについて

第１節　柔道ルネサンスの目的と趣旨

柔道ルネサンスをプロジェクトしている講道館と全日本柔道連盟は次のように柔道ルネサンスを提唱している。「現在の柔道は国際化、競技化、スポーツ化が進み競技成績や勝敗が注目されていますが、21世紀を迎えた今こそ嘉納治五郎師範が提唱された柔道の原点に立ち返り、人間教育を重視した事業を進めようとする講道館・全柔連の合同プロジェクトです。」[4] このように柔道ルネサンスは講道館と全日本柔道連盟が唱えたものである。その趣旨は、「21世紀を迎え柔道の競技スポーツ化がより進行し、益々その国際的広がりを見せています。先のミュンヘンに於ける世界柔道選手権大会では、アフリカ大陸のチュニジアが、中近東のイランが、それぞれ初の金メダルを獲得しました。わが国発祥の柔道は、国際的スポーツとしてその地位を固め、もはや、ある特定の国々のみが高い競技力を誇るとういう時代は過去のものとなりつつあります。柔道がこのように普及してきた理由は、競技としての魅力だけでなく、創始者嘉納治五郎師範の位置づけられた柔道修行の究極の目的である「己の完成」「世の補益」という教育面が、世界の人々に受け入れられたことに拠るものと思われます。師範は競技としての柔道を積極的に奨励する一方、人間の道としての理想を掲げ、修行を通してその理想の実現を図れ、と生涯を懸けて説かれました。講道館・全日本柔道連盟は、競技としての柔道の発展に努力を傾けることは勿論、ここに改めて師範の理想に思いを致し、ややもすると勝ち負けのみに拘泥しがちな昨今の柔道の在り方を憂慮し、“師範の理想とした人間教育”を目指して、合同プロジェクト「柔道ルネサンス」を立ち上げます。」[5] その主目的は、組織的な人づくり・ボランティア活動の実施であり、本活動を通して、柔道のより総合的普及発展を図ろうとするものである。

第２節　今、なぜ柔道ルネサンスなのか

日本の柔道の競技力は、「一本」を目指す柔道として柔道の国際普及に大きく貢献し、柔道の醍醐味を世界に向け発信してきた。国内でも2003年9月に大阪で世界柔道選手権が開催され、テレビ放映によって柔道の魅力を国民に伝えることができた。しかし、それらは柔道本来の魅力や醍醐味ではなく、相手を投げたときの豪快さや美しさだけを見て感銘した人が多いように感じる。では、柔道の根本的な魅力とは、何なのだろうか。それは、嘉納治五郎師範が柔道修行の目的として掲げている、人としての道徳的な生き方を目指す、または、社会に大きく貢献している人が実際にいるというようなことなどが人々を引き付ける要素だと考える。

それでは、今、なぜ柔道ルネサンスを唱え、活動を行っているのだろうか。それは、日本で生まれた自文化が世界各国の異文化と溶け合い、スポーツ化して異質柔道ともとれる形となって、自国に帰って来た時に、自文化までをも侵食してしまったからである。それだけのス

ポーツの要素を抱え込んでしまっただけに、柔道競技の在り方、競技者の在り方、会場でのマナーの在り方等が問われており、なかでも注目されるのが、競技者や会場でのマナーの在り方であるとされている。例えば、柔道の大会などでの会場の使い方の悪さやゴミの始末の酷さ、あるいは選手や指導者がルールを守らない、応援の態度がよくない、野次を飛ばす、勝った後の態度がよくない、などという現状がある。そして、それらを少しでも改善していく為に、講道館と全日本柔道連盟は、柔道ルネサンスのプロジェクトを立ち上げ、柔道の大会会場でスピーチなどを行い、柔道ルネサンスの趣旨を理解してもらうと共に、嘉納治五郎師範の説く、人間教育の再認識を求めているのである。

柔道は、他のサッカーや野球のようにやって楽しい、観戦して楽しいというものではなかったり、わかりにくかったりする部分もある。しかし、柔道が人間教育に与える影響は、計り知れないものである。また、多方面において、その期待が大きいがゆえに、柔道ルネサンスが今、提唱され、国内の柔道界はさらなる飛躍を目指しているのである。

第５章　今後の柔道

今後の柔道には、いくつかの諸問題があり、それら全てにおいて柔道本来の理念を少しでも残さなければならない打開策を必要としている。それは、柔道が国際化するとともにスポーツ化され、競技スポーツとしての要素だけが強まり、本来の目的・理念が薄れてしまっており、ともすれば、嘉納治五郎師範の柔道理念を後世に伝えることができなくなってしまうのである。普段の日常生活のなかで、眠るとき以外は靴を脱がない欧米人にとって裸足で行う競技や、また肉食を常食とする者にとって、稲作の副産物であるワラで作った畳の上で行う競技は、自国の伝統文化とは全くの異文化として受けとめてしまったことと、柔道競技として競技性を先に受け入れた為、嘉納治五郎師範が説く柔道理論が、後から付いてくる形となり、親文化との間に問題が生じたと考える。その為に競技中心となり、異文化のスポーツの概念として、勝利至上主義を基盤に自国選手の体型や運動能力に合わせた有利なルールになるよう改正案を提出するなど、各競技で問題となっている。

ドーピングは、競技力を不正に高めることから、スポーツのフェア・プレイの精神に反するという倫理的な理由と、薬物使用による副作用から選手の健康を損ねるという医学的な理由により禁じられている。国際オリンピック委員会では「禁止薬物リスト」を作成し、試合後に選手の尿を取り、その尿からリストの中の薬物が発見された場合は、原則としてその選手がドーピングを行ったと判断するなど、厳しい姿勢でドーピング問題に対処している。また、1998年にはカナダのオタワにおいて27カ国が参加して、第１回のアンチ・ドーピング永続世界会議が開催され、「国際アンチ・ドーピング憲章」を採択することで、国際協力でドーピング撲滅作戦を展開していくことが確認された。

柔道だけでなく他の競技においても、自らの健康を損なう薬物には、決して手を出してはならないことであり、もし使用している選手を見

かけたら、勇気を出してやめさせるほうが、人間的、精神的に大きく成長するのではないかと考える。

このように、柔道が国際化、スポーツ化され、そこから入ってくる外的物質により、様々な変貌を見せ、競技性が強まるだけでなく、最近では柔道をひとつの商業としてとらえようとする動きもみられる。柔道が国際普及してきた近年では、世界選手権やオリンピックなどが国内でテレビ放送され、そのテレビ放映権収入もそのひとつである。また、柔道に関するキャラクターの人形やシャツ・カレンダーなどの商品を販売して収入を得、柔道連盟の運営に充て、柔道普及のためにと、試行錯誤を繰り返している。本来、「柔道は見世物などに対して、お金をもうけるものではない」と嘉納治五郎師範も述べていた。しかし、現在の経済状況は大変厳しいものがあり、運営を維持していくための資金が集まらないのが現状である。また、関連グッズを販売する意図として、一般の人が柔道に興味を持つきっかけづくりや、その後の競技人口の増加、人気の維持に期待をよせている。

そして、世界に柔道の興味・関心を引き寄せたのがカラー柔道衣の存在である。この問題には、数々の議論が飛び交う中、次のような見解を国際柔道連盟は発表している。

1．対戦中の選手の見分けが容易

2．テレビでの視聴率の向上

3．誤審率の減少

4．視聴率の向上に伴うスポンサーの増加

何カ国かの柔道連盟は白柔道衣が柔道の伝統であるという理由でカラー柔道衣の導入に反対している。特に日本は強力に反対している。しかし、白柔道衣は、日本の伝統であるというよりは、むしろ、日本文化である。日本では、白は清潔さ、潔白さ、純粋さ、高尚さを意味している。国や組織はそれぞれの色のもつ意味合いについて独自の考え方を持っている。同じ色についても国によって、異なった性格を持つことが考えられる。例えば、中国や韓国はアジアに属するが、白色は死を意味し、葬儀の際の着物として用いられる。

また、カラー柔道衣を提唱し世界に広め、国・地域で使用を始めたとしても、経済的に余裕がない国では、柔道衣を購入することすら難しい場合が多い。しかし、そのような国々には“柔道衣”を無償で提供する等の配慮があり、国際柔道連盟の提案が通ったように感じられる。

柔道の発祥地は日本であり、その柔道の技と精神は、我々が追求し続けなければならないが、日本文化（柔道＝白柔道衣の考え）を普及させることは我々の役割ではなく、これから我々が行うべき柔道は、世界に２つのルールが存在する柔道、つまり理論的にも現実的にも２つのルールが存在する以上、それに基づく２つの競技が存在する柔道を、いかに発展させていくのかと同時に、柔道本来の目的理念を継承し、魅力や素晴らしさを多くの人々に伝えていくことが今後の課題であると考える。

そのためには、今では国際化、スポーツ化している柔道を親文化としての固定概念を守るだけでなく、柔軟な姿勢で柔道を捉えていくことも同時にしなければ、日本の柔道が世界から孤立してしまう可能性もある。

1952年に国際柔道連盟が発足してから半世紀を過ぎたが、国際柔道連盟規約第１条には「国際柔道連盟は非政治的団体であって、人種、宗教による差別を設けない。国際柔道連盟は嘉納治五郎によって創始されたものを柔道と認める。」と今もなお、嘉納治五郎師範の名前が明記されている。柔道が創始されてから、時が過ぎ、時代の流れや社会の変動によって柔道が少しずつ変容していく中で、国際柔道連盟規約第１条に嘉納治五郎師範の名前が明記されている意味を再認識する過程が必要である。

まとめ

1882年に嘉納治五郎師範によって創設された日本伝講道館柔道は、多くの人物の手によって世界へと広がり、その範囲は拡大する一方であり、それに伴い、柔道本来の理念や目的が薄れ、競技性だけを重視して柔道に取り組んでしまっている指導者や競技者の姿勢が見られる。

柔道の醍醐味として、豪快な投げ技、芸術的な寝技など、柔道をやっている者ならば誰もが追求するものであり、競技力の向上を図る上では、しっかりとした目的なのではあるのだが、その成果を披露する場である各種大会や試合などでは、互いの技の掛け合いというよりも、力によって相手を押さえ付けたり、試合運びの優劣をつけたりなど、柔道の魅力が欠けてしまっているのが現状である。また、勝利至上主義により相手と戦うというよりも、そこにあるルールと戦っているようにも受け取れる。

柔道本来の目的は、創始者である嘉納治五郎師範が、「修心・体育・勝負」という目標を掲げ、「精力善用」「自他共栄」の精神によって、柔道を通し、世に大きく貢献できる有能な人格を形成しようとするものである。このような現状を鑑み、全日本柔道連盟が実施している「競技者育成事業」の中で一貫指導システムを構築させ、ジュニア期から競技者に再認識させると同時に、指導者が先頭となって講道館柔道本来の目的・理念と魅力を正しく伝えていくことが柔道の更なる発展につながると考える。

引用文献

１）スポーツ学の視点　P59
２）スポーツ学の視点　P60
３）スポーツ文化論シリーズ3　スポーツをとりまく環境　P183
４）全日本柔道連盟サイト
５）全日本柔道連盟サイト

参考文献

岡野　進，矢野　龍彦：「スポーツのはなし」，有限会社　創文企画，1996年.
加藤仁平：「新体育学講座　第35巻嘉納治五郎」，逍遥書院，1964年.
江田昌佑：「スポーツ学の視点」，株式会社　昭和堂，1996年.
中村敏雄：「スポーツ文化論シリーズ③　スポーツをとりまく環境」，有限会社　創文企画，　1993年.
中村敏雄：「スポーツ文化論シリーズ⑤　外来スポーツの理解と普及」，有限会社　創文企画，1995年.
村田直樹：「嘉納治五郎師範に学ぶ」，財団法人

日本武道館，2001年.

村山輝志：「新体育学講座　第65巻　柔道管理学」，逍遥書院，1975年.